

## 日本における心身障害者体育の史的発展の特質

— 「日本における心身障害者体育の史的研究」の結語に代えて—

北野 与一 \*

The Chief Characteristics of the Development of Physical Education  
for the Handicapped in Japan

— In Conclusion of “A Historical Study of  
Physical Education for the Handicapped in Japan” —

Yoichi Kitano \*

Received October 24, 1995

### はじめに

「日本における心身障害者体育の史的研究」の課題は、日本における心身障害学校の体育について、その発展の過程を学校種別ごとに通史的に明らかにし、その特質についても検討を加えて、障害体育の行くべき道を探ることであった。本研究は、昭和51(1976)年度に始められ、翌年度にはその第1報が報告された。爾来約20年を経て漸く結語と言える論稿を、不安と期待の入り混じった複雑な心境で報告できることは、真に感慨深いものがある。

本章では、対象としてきた盲学校体育、聾学校体育、精神薄弱(以下、知的障害という)・肢体不自由(以下、運動障害という)・病弱の各養護学校体育について、これまでに得られた知見を以下に掲げた事項に関して比較検討し、学校種別を越えた共通性や類似性、さらにそれぞれの学校体育がもつ独自性や異質性を明らかにし、本研究の結語としたい。

1. 教育の発足と体育の位置づけ
  - (1) 教育の発足時期とその背景
  - (2) 体育の位置づけ
2. 体育の発展に係わる主要事項
  - (1) 社会スポーツの高揚
  - (2) 体育に関連する教育方針の設定
  - (3) 医学的研究の進展

---

\* 法 学 部  
Faculty of Law

### 3. 特徴のある指導法

- (1) 一般的指導法
- (2) 特殊な指導法

### 4. 障害種別・程度に即した体育的諸活動

- (1) 教科と一体の行事活動
- (2) 独自性の強い課外活動

## 1. 教育の発足と体育の位置づけ

### (1) 教育の発足時期とその背景

障害教育では、そのすべてが同時期に教育を開始したわけではない。障害の種別によって教育の発足時期に遅速が見られた。

盲学校教育と聾学校教育の発足は、養護学校教育よりかなり早く、明治11(1878)年のことであり、障害教育の先駆的役割を果たした。また、養護学校教育は、明治期の半ば以降から昭和期の初めにかけて発足しており、当初、施設教育や特別学級教育という教育形態で展開された。いずれの障害教育も、その発足に当たっては、わが国の初等教育の影響は言うまでもなく、欧米先進国における障害教育の影響を直接・間接に受けた。

発足を促進させた背景には、明治期における盲学校教育や聾学校教育の発足に係わる慈善事業的理念<sup>(1)(2)(3)</sup>、大正期における盲学校教育、聾学校教育及び施設教育の発足に係わる社会事業的理念<sup>(4)(5)</sup>、昭和期の病弱施設教育に係わる厚生事業的理念<sup>(6)(7)</sup>等、社会福祉の前史的理念が存在した。加えて、教育的・社会的な文部省当局からの国家的要請も背景にあった。例えば、教育的要請としては、師範学校附属小学校に障害児のための特別学級を設けるよう要請した明治40(1907)年の「文部省訓令第六号」の発令<sup>(8)(9)</sup>、盲学校及び聾学校の設置等に係る大正12(1923)年の「盲学校及聾哑学校令」の公布<sup>(10)(11)</sup>、養護学級の設置に係る「国民学校令」の制定<sup>(12)</sup>、あるいは明治期末から大正期初めにかけての当局の学力向上政策や義務教育の強化策等に見られる文教政策<sup>(13)(14)</sup>があった。一方、社会的要請としては、大正期から昭和期初めにかけての休暇集落事業等があった。

### (2) 体育の位置づけ

障害教育の発足には、その種別によって時期的なずれが見られたが、その発足当初は言うまでもなく、発展過程において、体育がどのようにとらえられ、教科として位置づけられたかについて、主要な事項を以下にまとめる。

① 体育運動は、障害の克服や改善に役立つ活動と認識された。このことは、例えば、以下に掲げた学校種別ごとの体育教育に係る目標からも推知することができる。

ア. 盲学校体育 移動(歩行)能力の向上, 不良姿勢・固癖の予防矯正<sup>(15)(16)(17)</sup>。

イ. 聾学校体育 呼吸器系統(胸郭)の発育・発達の促進, 平衡能力の向上<sup>(18)(19)(20)</sup>。

ウ. 養護学校体育: 知的障害 感覚・運動中枢の発達, 注意力・意志力の養成<sup>(21)(22)</sup>。

運動障害 障害に対する治療・矯正<sup>(23)(24)(25)</sup>。病弱 体質の改善, 健康の回復<sup>(26)(27)</sup>。

② 体育運動は、残存機能の発達をより促進する活動と認識された。上記と同じく、例えば、以下のような目標からも推知できる。

ア. 盲学校体育 視覚以外の感覚の発達・活用, 運動機能の発達<sup>(28)</sup>。

- イ. 聾学校体育 口話的習慣の養成, 振動感覚の発達・活用<sup>(29) (30)</sup>。
- ウ. 養護学校体育: 知的障害 快活な心情の育成, 体力の増進<sup>(31) (32)</sup>。運動障害 障害のない部位への運動訓練, 精神的・情緒的安定化<sup>(33) (34)</sup>。
- ③ 体育運動は, 心身の調和的発達や人間性の育成に貢献し得る活動と認識された。こうした理念は, 学校体育における一般的理念でもあったが, 一般の学校教育への準拠姿勢からも強調された理念であり, その認識は, 以下の指導事例等からも理解できる。
- ア. 盲学校・聾学校体育 大正期における人格陶冶強調の体育指導<sup>(35)</sup>, 第二次世界大戦後の望ましい人間関係の育成を目指した体育指導<sup>(36) (37)</sup>。
- イ. 養護学校体育: 知的障害 大正期から昭和期初めにかけての特別学級における心身の調和的発達を目指した指導方針<sup>(38)</sup>, 第二次世界大戦後の「働ける体」の育成を掲げた運動指導<sup>(39)</sup>。運動障害 全人的健全な発達を目指した東京市立光明学校の治療体操科の指導指針<sup>(40)</sup>。病弱 「人間をして人間らしく成長させる」ことをねらいとした重症児教育。

以上の3点は, 主要な体育教育に対するとらえ方であるが, 総じて言えば, 障害学校教育が発足して以来, その体育教育は, 障害種別を越えて「人間教育と深く係わる運動・からだを通しての教科」<sup>(41)</sup>として位置づけられ, 発展をみた教育であった。

## 2. 体育の発展に係わる主要事項

障害学校体育の発展に寄与した事項は, 多々あるが, その主要な事項には, 以下のような社会的, 教育的, 医学的各事項があった。

### (1) 社会スポーツの高揚

社会におけるスポーツ熱の高揚は, 障害学校体育の発展に大きく影響した。その1例として, 大正期から昭和期初めにかけての盲学校体育及び聾学校体育の発展を挙げることができる。以下, この問題について述べる。

京都, 東京, 大阪及び名古屋等における大都市の盲学校及び聾学校では, 明治30年代半ばには既に校友会型の組織が教員主導型でつくられており, 大正期にかけてその活動を漸次活発化させた<sup>(42)</sup>。大正14(1925)年10月, 「点字大阪毎日主催, 帝国盲教育会近畿部後援, 第1回関西盲学生体育大会」が, 大阪市立盲学校で開催される<sup>(43)</sup>。この大会は, 翌年度「全国盲学生陸上競技大会」と改称され, その年に組織された盲学生体育連盟の主催となり, 昭和18(1943)年の第18回大会まで継続開催された<sup>(44)</sup>。この大会の企画は, 社会のスポーツ熱に呼応したものであり, 盲学生の志気を高め, 運動に対する積極性の涵養に寄与しようとの意図からであった。また, この大会は, その発展過程で盲学校体育に係わる教材・教具の考案, 地方における小規模盲学校体育の振興, 各校の体育施設の充実, 盲学校体育連盟の組織化, 盲教育の啓蒙等に寄与したのである<sup>(45)</sup>。

名古屋市立盲聾学校聾部及び大阪市立聾学校が全国に先駆けて大正初年に運動部を組織したように<sup>(46)</sup>, 聾学校の課外体育活動は, 盲学校のそれよりも早期に開始される。その背景には, 社会におけるスポーツ熱の高揚があった。その高揚は, 視覚でとらえることのできる聾児童・生徒を刺激し, 正課・課外の体育活動を促進したのである。

当初, 興味をもったスポーツが余興的自然発生的に校内で行なわれるようになり, 全校

的な課外体育活動へと組織化されたり、学校行事としてのスポーツ大会へ、同質類似の他学校・団体との競技会へ、あるいは異質の他学校・団体との競技会へと、その活動は、漸次拡大・多様化されたのであった<sup>(47) (48)</sup>。課外活動として活発に行なわれた運動には、第二次世界大戦が終わった昭和20(1945)年頃までは、庭球、陸上競技、すもう、排球、籠球、卓球、野球及び剣道等があり<sup>(49)</sup>、同30年代以降では、陸上競技、バレーボール、卓球及び野球がある。なお、聾学校の全国的規模の体育連盟は、上記大戦後の社会スポーツの高揚と係わって結成される。

## (2) 体育に関連する教育方針の設定

体育に関連する教育方針とは、体育が指向する内容、あるいは貢献し得る内容の教育方針の意であり、例えば、健康の増進、体力の向上、心情の安定、心身の調和的発達、人格の陶冶、治療・リハビリテーション、養護等の教育方針内容である。こうした方針が掲げられたときには、体育教育においてさらなる進展があった。

知的障害特別学級では、以下のような事例<sup>(50)</sup>が見られた。発足当初、「学力向上・知能啓発」が目標に掲げられていたが、体育は、「主として『意志に従って行動が出来る』、『動作の機敏・活発』、『快活な心情』、『注意の集中』」等を指導上重視し、上記目標達成に寄与しようと努めた。その後、昭和期に入って「学力向上・知能啓発」に対する困難性が指摘されるようになり、指導上容易と考えられた『健康及体力』、『身体の発育・発達』、『身体の健康』等が方針の中で強調され、体育は、「からだを鍛える」方向へ変容していく。さらに昭和10年代には、「職業的自立が教育方針の中核となり、『学科の教授よりはむしろ養護や訓練に重点』を置く」こととなる。体育は、「職業準備指向の『強健な人、働くことが好きな人』の育成」を目標とした「総合的教授」の中でより重要な役割を果たした。

一方、病弱養護学校教育でも、以下のような事例が見られた。この教育では、「教育・養護・訓練、あるいは運動・栄養・休養の三位一体の総合的指導が昭和初年まで続いたが、同10年代に入り、軍事体制が強化されていく中でその一体性がくずれ、積極的養護の強調、人的資源の確保といった軍国主義的<sup>(51)</sup>な養護教育理念が打ち出される。その結果、指導上「積極的鍛練の増強化」や「身体的諸活動の増加」が顕現し、病弱児童・生徒の「健康保持・増進」に重大な影響を与えた<sup>(52)</sup>。

## (3) 医学的研究の進展

障害種別を問わず、どの障害学校教育も、医学的領域と深い係わりをもって発展した。この項では、特に医学的治療が優先した運動障害及び病弱の各養護学校教育について述べる。

大正10(1921)年開園の柏学園並びに昭和7(1932)年開校の東京市立光明学校は、いずれも当時先進の治療を誇った東京帝国大学医学部整形外科教室の指導と援助によって設立・経営された<sup>(53) (54)</sup>。

柏学園<sup>(55)</sup>では、体操科は、治療体操、保健運動(当初、治病体操、保健体操という。)と呼称され、大筋運動の機能回復・改善を目標とした治療課業として位置づけられていた。治療体操は、四肢・躯幹の障害に対する治療であり、また、保健運動は、障害のない部位や障害の軽い児童に普通体操・遊戯等を課すことを内容としていた。一方、東京市立光明

学校<sup>(56)</sup>では、体操科を治療体操科と称し、障害の治療を主体に「異常なき部分」にも適切な刺激を与え、全人的健全な発達を目指す教科と位置づけた。その運動教材は、矯正(治療)体操(運動)、治療的運動、保健運動(普通体操)及び遊戯であった。同校の教育は、柏学園の経験と実績を継承していたが、柏学園の教育とは異なり、経営上の円滑性、医療上の最新知見・技術の導入とそれに伴う体育指導上の改善が見られた。医療上では、柏学園のマッサージ主体の施療とは異なり、電気治療、熱気浴、太陽燈浴、温浴、日光浴等の多様な理学的療法がマッサージと合わせて施療された。また、矯正治療では、腱伸展術、膝伸展矯正等の外、矯正運動や矯正体操を初め、砂枕矯正、縋帯矯正、矯正器装用、コルセット、ギブスベット等の多様な方法が障害に即して講じられた。治療体操科では、そうした治療と並行して病類別・疾患部別の系統的な「治療体操要目」(昭和12年度)が編成される。この要目は、治療体操を「肢体不自由児童の健康を保持増進すると共に、その欠陥部位の治療矯正を目的として、合理的に配列された体育的運動類の一組を謂ふ」と定義し、大運動(種目)、小運動(教材)、用具、回数順に各項目を3段階に教程化した画期的なものであった。

病弱養護学校教育もまた、医学的研究の進展が大きく影響した教育であった。以下、その若干を障害体育について検討する。

喘息児の体育では、当初、個々の障害程度に応じた適切な運動の質と量の決定方法が明らかではなかった。昭和50年代に入り、最大呼気量(PFR)の変化から運動の質と量を科学的にコントロールするための研究がなされ、%PEFRとEIA(運動負荷発作)との関係、EIAと運動種目との関係等が解明され、%PEFRと% $V_{25}$ との併用、%1秒量の運動前後の変化等も検討され、運動の質と量が適切に調節できるようになり、体育の指導が容易となった。

心臓医学の進歩より、心疾患に対する体育的対応も変容する。昭和40年代にはリュウマチ性心臓弁膜症が、同50年代には先天性心疾患が激減する。一方、同48(1973)年学校保健法の一部改正に伴い、学校の定期健康診断に心臓検診を行なうことが義務づけられ、心疾患に対する医学的早期対応も可能となり、教育的対応も容易となる。こうした動きの中で厚生省や日本学校保健会により心疾患管理規準や心臓病管理指導表が作成され、心疾患患者にも許される範囲内で病状に応じた体育、あるいは身体的活動等が適切に実施されるようになった。

血友病の治療は、昭和40年代初め頃までは新鮮な血液を輸血する以外に、安静、冷湿布しかなかった。その後、同50年代にかけて活性因子の製剤化が進み、比較的容易に止血することが可能となった。血友病疾患の体育指導は、こうした薬剤の開発・供給と深く係わって進展した。近年は運動禁止と言われた児童・生徒であっても体育学習に何らかの形で参加させるようになっており、また、従来実施不可能と考えられた多様な運動が指導できることとなった。

### 3. 特徴のある指導法

障害学校教育が公教育として位置づけられた当初から、小学部、中学部等の各学部は、それぞれが一般の小学校、中学校等における教育課程に準拠の姿勢をとってきた。しかし、準

扱と言っても完全な形で取り入れることは不可能なことであり、教科体育では、主として盲学校教育と聾学校教育に見られた「障害に係わる特殊性を加味した準扱型」、知的障害養護学校教育に見られた「学年レベルを下げた水増し準扱型」及び病弱養護学校教育における重症心身障害者（重度・重複障害者）に対して見られた「養護・訓練的な代替準扱型」という3型が存在した。こうした準扱教育の下で、以下に掲げた特徴のある指導法が展開されたのである。

### (1) 一般的指導法

一般的指導法とは、障害種別に関係なく、障害全般に通ずる指導法の意であるが、それには、障害程度に即した指導、個別・集団指導の併用、総合的指導、運動の習慣化を重視した指導及び教材・教具の開発・考案による指導を挙げることができる。

#### ① 障害程度に即した指導

昭和40年代から漸次顕現し始めた障害の重度化・重複化の中で、障害学校体育では、それら児童・生徒一人ひとりの障害の程度に即したきめ細かな指導が必要となり、障害種別を問わず、指導上肝要なこととなった。その指導に係わる方向は、学習指導要領で示され、要領の改訂ごとに弾力的に改善されていった。従って、現場では、障害の程度に即した多様な指導が創意工夫によって展開されたのである。以下に、若干の事例を挙げる。

知的障害養護学校体育においては、遊び型、生活型、鍛練型、矯正型、クラブ型の各指導法、あるいは体育という教科としての学習形態の外に、からだの学習、養護・訓練的体育学習、遊び学習等の教科・領域統合型の学習形態も展開された<sup>(58) (59) (60)</sup>。また、病弱養護学校体育においては、病弱の種別と程度による生活規制度別の個別指導が、教育と医療の一体化された態勢の下で実施された<sup>(61) (62) (63) (64)</sup>。

#### ② 個別・集団指導の併用

先に述べた障害程度に即した指導と個別指導重視の指導は、同一理念から出発した指導であった。しかし、個別指導を重視したからと言って集団指導を排除したわけではなかった。個別指導を徹底しても、人間教育としての教育的成果を期待するには限界があった。どのような障害であっても、人間教育は、集団の中で人間関係に係わって成果が得られるものととらえられ、集団指導も肝要とされた。

障害学校体育では、その目標の一つに、「人間関係における協力と責任を自覚させる」<sup>(65)</sup>（盲学校体育）、「社会性の涵養」<sup>(66)</sup>・「望ましい人間関係の育成」<sup>(67)</sup>（聾学校体育）、「社会的適応力の養成」<sup>(68) (69)</sup>（知的障害養護学校体育）、「協力的な態度、公正な態度等の育成」<sup>(70)</sup>（運動障害養護学校体育）、「社会性を育てる」<sup>(71)</sup>・「人間らしく成長させ、心豊かな生活ができるようにする」<sup>(72) (73)</sup>（病弱養護学校体育）等の目標が掲げられた。これらの目標は、適切な規模による集団によってのみその成果が期待できる目標であった。つまり、個別指導と集団指導の繰り返し指導、あるいは集団指導の中で個別指導を行なう並行指導等、両者それぞれが自らの長短を補う形で、成果が最大限に期待できるような両者併用の指導が実践された。

#### ③ 総合的指導

ここで言う総合的指導とは、広義では、学校教育全体を通じての指導であり、また、

そうした学校教育と医療とが一体化された指導の意である。狭義では、教育、養護、訓練が、あるいは運動、栄養、休養が三位一体となった指導の意である。障害学校体育における指導上の特徴の一つに、この総合的な指導があった。

盲学校体育及び聾学校体育において、当初から教科体育、特別教育活動及び行事活動の一体化された指導が行なわれてきており<sup>(74)(75)</sup>、昭和46年に学習指導要領が改訂され、体育指導は「学校の教育活動全体を通じて適切に行なうもの」<sup>(76)(77)</sup>となり、さらにこの総合的な指導が重視されるに至った。勿論、養護学校体育においても同じ動向が見られた。その総合的指導に係る若干の事例を挙げると、例えば、「教科を間切りしない」指導<sup>(78)</sup>・教科・領域統合の「遊び型」「生活型」等の指導<sup>(79)</sup>（知的障害）、「教育（体育）と治療・訓練の併合」の指導<sup>(80)(81)</sup>・「養訓的体育指導」<sup>(82)</sup>（運動障害）、「教育、養護、訓練、あるいは運動、栄養、休養の三位一体」の指導<sup>(83)</sup>・「生活規制度別の指導」<sup>(84)</sup>（病弱）等がある。

#### ④ 運動の習慣化を重視した指導

身体移動・身体活動に障害をもつ視覚障害・運動障害・病弱の児童・生徒は言うまでもないが、一般的に障害児童・生徒は、運動の習慣化・生活化が身につけていない。従って、障害学校体育では、以下のような運動の習慣化・生活化をねらった指導が指導上肝要とされてきた。若干の事例からもこのことが推知できる。

盲学校体育：各種スポーツ大会の企画<sup>(85)(86)</sup>、各種スポーツ教材の開発・考案<sup>(87)(88)</sup>、余暇利用の態度・技能の育成指導<sup>(89)</sup>等。

聾学校体育：各種スポーツ大会の企画<sup>(90)(91)</sup>、「運動誘発のための工夫」した指導<sup>(92)</sup>、余暇利用の態度・技能の育成指導<sup>(93)</sup>等。

養護学校体育：生活型・遊び型等の指導<sup>(94)(95)</sup>（知的障害）、「玩具治療」<sup>(96)</sup>・「総合的機能訓練を目的とした諸行事」の企画<sup>(97)</sup>（運動障害）、運動の生活化をねらった指導<sup>(98)(99)</sup>・学校生活全体を通じての指導<sup>(100)</sup>・「戸外運動の重視」<sup>(101)</sup>（病弱）。

#### ⑤ 教材・教具の開発・考案による指導

障害学校体育では、指導教材・教具の開発考案は、指導上不可欠なことであった。障害の種別や程度によっては、一般に行なわれている通常の運動やスポーツ（あるいは用具）を指導するには多くの障害が起きる。従って、通常の運動やスポーツを障害に即した、しかも安全性・興味性の高い教育的・体育的な教材・教具に修正・改善したり、また、新たな教材・教具を開発して指導効果をより確かなものにしてきたのである。言うまでもなく、それらの教材・教具は、それぞれの学校体育の中で定着したり、あるいは新たに改良されて今日に至っている。

これまでに開発・考案された教材・教具の主要なものは、以下のとおりである。

盲学校体育：盲人野球（鈴入りボール）、円周走（木管・輪、継走器）、盲人（用）卓球（玉入りボール）、盲人バレーボール、体操用巧技台等<sup>(102)(103)</sup>。

聾学校体育：指示用具としての太鼓<sup>(104)</sup>。

養護学校体育：投球遊戯具<sup>(105)</sup>・「簡易遊び・自転車のり」<sup>(106)(107)</sup>・運動能力測定法<sup>(108)</sup>（知的障害）、運動要目<sup>(109)</sup>・「棒体操・簡易サッカー・ポートボール」<sup>(110)</sup>・「洗濯体操・トントン体操」「座位野球・ローリングハンドサッカー・ホッケー・ゴロ卓球・

ラグビー」<sup>(111)</sup> (運動障害), 喘息体操<sup>(112)</sup> <sup>(113)</sup>・筋ジス体操<sup>(114)</sup>・「腎・ネフ体操」<sup>(115)</sup>・心体操<sup>(116)</sup>・「他動的なゆさぶりーバルーン等」<sup>(117)</sup> (病弱)。

## (2) 特殊な指導法

特殊な指導法とは、一般的指導法とは異なり、個々の障害学校体育における特有の指導法の意である。

### ① 盲学校体育－皮膚感覚・聴覚活用の指導

盲学校体育における皮膚感覚・聴覚を主として活用した指導は、視覚以外の残存機能を活用した指導であり、視覚障害者を対象とする学校体育特有の障害補完の指導であった。

例えば、皮膚感覚を活用しなければならない教材には、鉄線走、柔道、すもう<sup>(118)</sup>等があり、聴覚を主として活用しなければならない教材には、音源走、盲人(用)卓球、盲人野球等<sup>(119)</sup>がある。また、円周走、盲人バレーボール等は、両者の活用を必要とする教材である<sup>(120)</sup>。

### ② 聾学校体育－振動感覚・視覚活用の指導

振動感覚や視覚を主として活用した指導もまた、視覚障害をもつ児童・生徒の体育指導と同じく残存機能を活用した指導であり、聴覚障害をもつ児童・生徒の体育特有の障害補完の指導であった。例えば、太鼓を利用した指示指導やリズム指導は、振動感覚を活用したものであり、旗などの見える器具を利用した種々の指導は、視覚を活用した指導である<sup>(121)</sup> <sup>(122)</sup>。なお、聾教育特有の教育法である口話法や手話法は、いずれも視覚を通じた方法である<sup>(123)</sup>。

### ③ 知的障害養護学校体育－自立論的立場・発達論的立場に立った指導<sup>(124)</sup>

ここで言う自立論及び発達論とは、前者が社会自立論・社会適応論、後者が発達保障論・全面発達論という目標論の略称である。自立論的立場に立った指導は、戦前・戦後(第二次世界大戦)を通じて知的障害教育の主流に位置づけられてきた指導であり、自立的生活力を身につけ、社会的適応性を助長するような具体的かつ総合的な指導を意味した。一方、発達論的立場に立った指導は、昭和40年代から同50年代にかけての障害の重度・重複化傾向の強まる過程において、従来の自立論の反省(特に、重度・重複障害者に対する自立論の適用の困難性において)から生まれたものであり、人間の「発達のすじみちの共通性」に則り、一人ひとりの発達の実態に即して可能な限り最大限の発達を図ろうとする指導であった。

自立論的立場に立った体育指導では、「健康な身体を育成し、体力の向上を図る」、「集団生活に必要な能力と態度を養う」等の目標をもった指導が行なわれ、主として中・軽度障害児童・生徒対象にこうした指導が展開された。また、発達論的立場に立った体育指導では、運動や遊び活動が発達の視点から明らかにされ、それに基づいた発達診断が実施され、プログラムに則って指導が行なわれる、つまり、発達の系統性に基づいた指導の系統性が立案され、指導が展開されるのである。例えば、感覚・運動中枢機能の発達を促進するための指導は、大脳における「感覚・運動の中枢から連合中枢へ」という自然的発達の順序性に基づいた指導であった。なお、後述の運動障害養護学校体育においても、重度・重複障害児童・生徒と係わってこの指導が重視された<sup>(125)</sup>。



## ④ 運動障害養護学校体育－機能訓練的・養訓的指導

運動障害児童・生徒に対する機能訓練的・養護・訓練的体育指導は、前に述べた盲学校体育や聾学校体育における残存機能を活用した指導とは異なり、直接的な障害の回復・改善をねらった指導である。また、この指導は、戦前の東京市立光明学校における治療体操科の体育と治療を併合した指導<sup>(126)</sup>、戦後の機能訓練や養護・訓練と体育とが統合された指導を意味しており、運動機能の向上と心身の適応をねらった運動障害体育特有の指導であった<sup>(127) (128)</sup>。

## ⑤ 病弱養護学校体育－規制度別の指導

規制度別の指導とは、疾病・障害別に健康度、安静度、障害度、虚弱度、学習度を医学的に段階別に標準化し、その規制度に従って生活全体を規制し健康の回復を図ろうとする指導である<sup>(129) (130) (131) (132)</sup>。体育指導もまた、こうした規制度の許容範囲内における総合的指導の一環として行なわれたのである。

なお、規制度別の指導の下で、以下に示すような病類ごとの特徴のある指導が展開された。

- ア. 肺結核：医師の管理下における指導<sup>(133)</sup>
- イ. 喘息：肺機能状態考慮の指導<sup>(134)</sup>
- ウ. 腎疾患：悪化予防・合併症予防配慮の指導<sup>(135)</sup>
- エ. 心疾患：突然死予防配慮の指導<sup>(136)</sup>
- オ. 進行性筋ジス症：機能低下阻止のステージ指導<sup>(137)</sup>
- カ. 血友病：出血防止配慮の指導<sup>(138)</sup>
- キ. 肥満：運動の習慣化指向の総合的指導<sup>(138)</sup>
- ク. 心身症：心理的解放を図る指導<sup>(138)</sup>
- ケ. 重症心身障害：発達の系統性に基づいた指導<sup>(139) (140)</sup>

4. 障害種別・程度に即した体育的諸活動<sup>(141) (142) (143) (144) (145)</sup>

体育的諸活動とは、教科体育（保健体育）以外の体育的活動を意味し、体育的な行事活動と課外における体育的な部活動を指す。

この体育的諸活動には、以下のような特徴が見られた。

## (1) 行事活動

体育的な行事は、障害種別に関係なく、教師主導型で企画・実施された。その行事の主たるものは、遠足と運動会であったが、漸次各種のスポーツ大会、地域環境を生かした各種のスポーツ教室、あるいは季節に係わる保養施設等、多様化していった。

その指導においては、教師主導型からも推知できるように、教科体育の延長、言い換えれば、教科体育と一体化された指導観が見られた。例えば、運動会の指導は、教科体育と同じ目標で、教科体育時に一般的に行なわれた。なお、戦前には、行事实施の背景に障害者に対する社会的理解を深めるための広報的姿勢も多々見られた。

## (2) 課外活動

課外の体育系部活動の特徴は、発展過程と活動種目において見られた。

## ① 発展過程の3類型

ア. 社会連動型 社会におけるスポーツ活動の高揚が児童・生徒を刺激し、児童・生徒は、当初、それと同じスポーツ、あるいは類似の考案したスポーツを自然発生的に行なう。次に、そのスポーツが教科体育や課外活動に取り入れられる。こうしてそのスポーツが教育活動の中に位置づけられたり、または活動母胎が確立されると、その活動の成果を問う段階へと進展する。同志間でゲームを行なったり、あるいは近辺の同質・異質の学校や団体とのゲームへと発展する。一方、行事化されたり、地域的な・全国的なスポーツ大会として企画され、連盟等も組織化されて活動が本格化していく。その代表的事例には、盲学校における「盲人野球」や「すもう」に係る課外活動の発展<sup>(146)</sup>や聾学校における大正期から昭和期にかけての課外活動の発展<sup>(147)</sup><sup>(148)</sup>等の事例がある。

イ. 目標提示型 地域、団体、学校等の関係者が健康生活の一層の促進を願い、障害に即した特定のスポーツ大会を企画・開催し、対象とする障害児童・生徒の興味・関心を意図的に喚起して課外活動に目標を与え、活動を活発化させていく。こうした目標提示型の主要な事例には、盲学校における陸上競技に係る課外活動<sup>(149)</sup>、聾学校における陸上競技に係る課外活動<sup>(150)</sup>、知的障害養護学校における陸上競技・サッカー等の「スペシャルオリンピック」種目に係る課外活動<sup>(151)</sup><sup>(152)</sup>、「全国身体障害者スポーツ大会」種目に係る障害学校の課外活動<sup>(153)</sup><sup>(154)</sup>等の進展がある。

ウ. 内部努力型 地域、団体、学校等の指導者が、あるスポーツを考案したり、外国で実施のスポーツを紹介し、それらを教科体育や課外活動で指導し、学習や活動をより活性化させていく。こうした内部努力型の事例には、盲学校における「盲人（用）卓球」や「盲人バレーボール」に係る課外活動<sup>(155)</sup>や運動障害養護学校における各種ボールゲームの指導等の進展がある。<sup>(156)</sup><sup>(157)</sup>

以上の発展類型も示すように、課外の体育系部活動の発展に係わる因子には、社会のスポーツ活動、児童・生徒のスポーツに対する興味・関心、指導者の取り組む姿勢、大会・連盟等の組織化があった。

## ② 多様化傾向を示す活動種目

障害学校における教育開始時期は学校種別によって異なるが、それぞれの教育開始の初期段階では、課外の活動種目は一般的に固定化の傾向を示した。例えば、盲学校では、陸上競技、すもう、「盲人野球」、「盲人（用）卓球」、「盲人バレーボール」、柔道<sup>(158)</sup>が、また、聾学校では、陸上競技、軟式野球、バレーボール、卓球<sup>(159)</sup>が、養護学校では、陸上競技<sup>(160)</sup>がそれぞれ主要な活動種目であった。しかし、昭和50年代半ば頃から障害に即した種々のスポーツが考案されたり、外国から移入されたりして活動内容の多様化が顕現化した。例えば、盲学校では、「盲人マラソン」<sup>(161)</sup>、水泳<sup>(162)</sup>が、聾学校では、サッカー、柔道、テニス、ゲートボール、ボーリング、バドミントン、ソフトボール、アーチェリー、水泳<sup>(163)</sup><sup>(164)</sup>が、養護学校では、体操、バスケットボール、サッカー、バレーボール、フリスビー、車椅子競技、ボーリング、水泳（以上、知的障害）<sup>(165)</sup>、車椅子バスケットボール、アーチェリー、卓球、車椅子テニス、バドミントン、車椅子マラソン、サッカー、ローリングバレーボール、ボーリング、水泳（以上、運動障害）<sup>(166)</sup><sup>(167)</sup>、水泳、各種ボールゲーム（重症心身障害）<sup>(168)</sup>等、障害種別に関係なく多様と

なった。

上記の障害に即した多様な新しいスポーツは、一般のスポーツをそのまま適用している場合は別として、一般のスポーツについて、実施方法、ルール、用具、施設等を改良・修正したり、あるいは簡易化したものであった。こうしたスポーツが定着し発展するには、それを行なう児童・生徒が高い関心や興味を示し、しかもそれを長く持続する・持続させることのできる活動であること、そのためには、そのスポーツが一般のスポーツに可能な限り類似した活動であることが重要であり<sup>(169)</sup>、しかも安全に楽しく活動ができ、教育的・体育的価値の認められる活動であることが必要であった。

## おわりに

本研究は、盲学校体育、聾学校体育及び養護学校体育を対象として、それぞれの体育史的発展を通史的に明らかにし、その特質についても検討を加え、終わりに、各障害学校体育について得られた知見を特定の事項の範囲内で比較検討し、学校種別を越えた共通性や異質性を指摘して結語とした。

障害体育の史的な研究は、近年、若干の研究者によって始められたところであり、課題が累積している。本研究に係わる研究課題も、以下のように、多く残されている。

- (1) 弱視、難聴、情緒障害、自閉症等の学校体育史的研究
- (2) 社会人を対象とした障害種別ごとの社会体育史的研究・生涯体育史的研究
- (3) 養護施設、矯正施設、福祉施設等の施設体育史的研究
- (4) 諸外国における多様な障害体育史的研究

末尾であるが、「日本における心身障害者体育の史的研究」すべてが北陸大学の配当研究費によってなされたものであり、特に本稿は、「北陸大学特別研究助成金」の補助によったものであることを付記し、北陸大学に対して深甚の謝意を表する次第である。

## 参考・引用文献

- (1) 東正雄・北野与一 (1977), 「わが国の盲学校及び聾学校における体育の形成過程とその特質」, 金沢大学教育学部紀要, (25), 教育科学編, pp.111-113
- (2) 東正雄・北野与一 (1978), 「わが国の盲学校及び聾学校における体育の形成過程とその特質 (第2報)」, 金沢大学教育学部紀要, (26), 教育科学編, pp.63-65
- (3) 文部省 (1958), 盲・聾教育八十年史, 二葉 (株), pp.33-35
- (4) 文部省 (1958), 前掲書, pp.85-86
- (5) 杉浦守邦 (1986), 日本最初の肢体不自由学校柏学園と柏倉松蔵, 山形県特殊教育史研究会, p.2 (序)
- (6) 北野与一 (1991), 「日本における心身障害者体育の史的研究 (第20報) - 小学校令時代の開放学校及び特別学級における病弱児体育について -」, 北陸大学紀要, (15), pp.279-299
- (7) 北野与一 (1992), 「日本における心身障害者体育の史的研究 (第19報) - 小学校令時代の休暇集落における虚弱児体育について -」, 北陸体育学会紀要, (28), pp.54-59
- (8) 東正雄・北野与一 (1978), 前掲論文, 前掲書, pp.63-65
- (9) 北野与一 (1983), 「日本における心身障害者体育の史的研究 (第8報) - 明治・大正初期の精神薄弱児体育について -」, 北陸大学紀要, (7), pp.109-111
- (10) 東正雄・北野与一 (1978), 前掲論文, 前掲書, pp.63-65
- (11) 東正雄・北野与一 (1979), 「日本における心身障害者体育の史的研究 (第3報) - 大正12年より昭和20年までの盲学校体育 - (第3報)」, 金沢大学教育学部紀要, (27), 教育学科編, pp.127-128
- (12) 北野与一 (1993), 「日本における心身障害者体育の史的研究 - 国民学校令時代の養護学級における虚弱児

- 体育について-」, 北陸体育学会紀要, (29), pp.2-6
- (13) 北野与一 (1983), 前掲論文, 前掲書, pp.109-111
- (14) 北野与一 (1987), 「日本における心身障害者体育の史的研究 (第14報) -昭和20年までの柏学園の肢体不自由体育について-」, 北陸大学紀要, (11), pp.196-203
- (15) 東正雄・北野与一 (1978), 前掲論文, 前掲書, p.68
- (16) 東正雄・北野与一 (1979), 前掲論文, 前掲書, p.133, 135, 139
- (17) 北野与一 (1980), 「日本における心身障害者体育に関する史的研究 (第6報) -戦後の盲学校体育に関する動向と課題-」, 北陸大学紀要, (4), pp.103-108
- (18) 東正雄・北野与一 (1978), 前掲論文, 前掲書, pp.71-72
- (19) 北野与一・東正雄 (1978), 「日本における心身障害者体育の史的研究 (第4報) -大正12年より昭和20年までの聾唖学校体育-」, 北陸大学紀要, (2), pp.75-76
- (20) 北野与一 (1978), 「戦後における聴覚障害体育に関する研究の動向と課題」, 北陸体育学会紀要, (18), pp.1-6
- (21) 北野与一 (1983), 前掲論文, 前掲書, pp.7-15
- (22) 北野与一 (1984), 「日本における心身障害者体育の史的研究 (第9報) -大正中期から昭和20年までの精神薄弱児体育について-」, 北陸大学紀要, (8), pp.114-117
- (23) 北野与一 (1987), 「日本における心身障害者体育の史的研究 (第14報) -昭和20年までの柏学園の肢体不自由児体育について-」, 北陸大学紀要, (11), pp.211-217
- (24) 北野与一 (1988), 「日本における心身障害者体育の史的研究 (第15報) -昭和20年までの東京市立光明学校における肢体不自由児体育について-」, 北陸大学紀要, (12), pp.167-182
- (25) 北野与一 (1990), 「日本における心身障害者体育の史的研究 (第16報) -昭和20年から同30年代半ばまでの肢体不自由体育について-」, 北陸体育学会紀要, (26), pp.82-84
- (26) 北野与一 (1991), 前掲論文, 前掲書, pp.282-284
- (27) 北野与一 (1993), 「日本における心身障害者体育の史的研究 -戦後における学習指導要領制定以前の病・虚弱児体育について-」, 北陸大学紀要, pp.47-51
- (28) 北野与一 (1980), 前掲論文, 前掲書, p.6
- (29) 東正雄・北野与一 (1978), 前掲論文, 前掲書, pp.76-77
- (30) 北野与一 (1979), 「日本における心身障害者体育の史的研究 (第5報) -戦後における聾学校体育の動向と課題-」, 北陸大学紀要, (3), pp.20-23
- (31) 北野与一 (1984), 前掲論文, 前掲書, pp.114-119
- (32) 北野与一 (1986), 「日本における心身障害者体育の史的研究 (第12報) -昭和40年代後期から同50年代にかけての精神薄弱体育について-」, 北陸大学紀要, (10), pp.172-175
- (33) 北野与一 (1987), 前掲論文, 前掲書, p.215
- (34) 北野与一 (1988), 前掲論文, 前掲書, pp.169-176
- (35) 東正雄・北野与一 (1978), 前掲論文, 前掲書, pp.75-77
- (36) 北野与一 (1980), 前掲論文, 前掲書, p.104
- (37) 北野与一 (1979), 前掲論文, 前掲書, p.22
- (38) 北野与一 (1984), 前掲論文, 前掲書, p.114
- (39) 北野与一 (1985), 「日本における心身障害者体育の史的研究 (第11報) -昭和30年代から同40年代前期の精神薄弱体育について-」, 北陸大学紀要, (9), p.78, 91
- (40) 北野与一 (1988), 前掲論文, 前掲書, p.182
- (41) 加藤安雄 (1975), 「慢性疾患等をもっている児童・生徒の教育」, 保健の科学, 17 (10), p.642
- (42) 東正雄・北野与一 (1978), 前掲論文, 前掲書, pp.70-75
- (43) 東正雄・北野与一 (1979), 前掲論文, 前掲書, p.130
- (44) 東正雄・北野与一 (1979), 前掲論文, 前掲書, pp.131-139
- (45) 東正雄・北野与一 (1979), 前掲論文, 前掲書, p.139
- (46) 東正雄・北野与一 (1978), 前掲論文, 前掲書, p.75
- (47) 東正雄・北野与一 (1978), 前掲論文, 前掲書, p.75
- (48) 北野与一・東正雄 (1978), 前掲論文, 前掲書, p.81
- (49) 北野与一・東正雄 (1978), 前掲論文, 前掲書, p.82
- (50) 北野与一 (1984), 前掲論文, 前掲書, p.114
- (51) 北野与一 (1991), 前掲論文, 前掲書, p.299
- (52) 北野与一 (1993), 「日本における心身障害者体育の史的研究 -国民学校令時代の養護学級における虚弱児体育について-」, 前掲書, p.6
- (53) 北野与一 (1987), 前掲論文, 前掲書, p.203, 206
- (54) 北野与一 (1988), 前掲論文, 前掲書, p.166, 182
- (55) 北野与一 (1987), 前掲論文, 前掲書, pp.211-217
- (56) 北野与一 (1988), 前掲論文, 前掲書, p.18
- (57) 北野与一 (1988), 前掲論文, 前掲書, pp.165-182

- (58) 北野与一 (1985), 「日本における心身障害者体育の史的 연구 (第 10 報) -昭和 20 年代の精神薄弱体育について-」, 北陸体育学会紀要, (22), pp.18-19
- (59) 北野与一 (1985), 「日本における心身障害者体育の史的 연구 (第 11 報)」, 前掲書, pp.87-91
- (60) 北野与一 (1986), 前掲論文, 前掲書, pp.176-179
- (61) 北野与一 (1993), 「日本における心身障害者体育の史的 연구 -国民学校令時代の養護学級における虚弱児体育について-」, 前掲書, p.4
- (62) 北野与一 (1993), 「日本における心身障害者体育の史的 연구 -戦後における学習指導要領制定以前の病・虚弱児体育について-」, 前掲書, pp.51-56
- (63) 北野与一 (1994), 「日本における心身障害者体育の史的 연구 -通達学習指導要領時代 (1963 - 1971) における病弱体育について-」, 北陸体育学会紀要, (30), p.6
- (64) 北野与一 (1994), 「日本における心身障害者体育の史的 연구 -告示学習指導要領時代 (1971 - 1985) の病弱 (喘息) 児体育について-」, 北陸大学紀要, (18), pp.206-211
- (65) 北野与一 (1980), 前掲論文, 前掲書, p.104
- (66) 北野与一・東正雄 (1978), 前掲論文, 前掲書, p.75
- (67) 北野与一 (1979), 前掲論文, 前掲書, p.22
- (68) 北野与一 (1984), 前掲論文, 前掲書, pp.114-120
- (69) 北野与一 (1985), 「日本における心身障害者体育の史的 연구 (第 11 報)」, 前掲書, p.91
- (70) 北野与一 (1991), 「日本における心身障害者体育の史的 연구 (第 17 報) -昭和 30 年代半ばから同 40 年代半ばまでの肢体不自由体育について-」, 北陸体育学会紀要, (27), p.79
- (71) 北野与一 (1994), 「日本における心身障害者体育の史的 연구 -告示学習指導要領時代 (1971 - 1985) の病弱 (喘息) 児体育について-」, 前掲書, p.206
- (72) 北野与一 (1995), 「日本における心身障害者体育の史的 연구 -告示学習指導要領時代を中心とした病弱 (重症心身障害) 児体育について-」, 日本体育学会第 46 回大会号, p.160
- (73) 加藤安雄 (1975), 前掲論文, 前掲書, p.642
- (74) 北野与一 (1980), 前掲論文, 前掲書, p.109
- (75) 北野与一 (1979), 前掲論文, 前掲書, pp.19-20, 28-29
- (76) 文部省 (1975), 特殊教育諸学校小学部・中学部学習指導要領, (改訂再版四刷), 慶応通信, p.7
- (77) 文部省 (1979), 盲学校, 聾学校及び養護学校小学部・中学部・高等部学習指導要領, 大蔵省印刷局, p.1
- (78) 北野与一 (1984), 前掲論文, 前掲書, p.115
- (79) 北野与一 (1985), 「日本における心身障害者体育の史的 연구 (第 11 報)」, 前掲書, pp.90-91
- (80) 北野与一 (1988), 前掲論文, 前掲書, p.182
- (81) 北野与一 (1991), 「日本における心身障害者体育の史的 연구 (第 17 報)」, 前掲書, pp.79-80
- (82) 北野与一 (1990), 「日本における心身障害者体育の史的 연구 (第 18 報) -昭和 40 年代半ばから同 60 年までの肢体不自由体育について-」, 北陸大学紀要, (14), p.338
- (83) 北野与一 (1991), 「日本における心身障害者体育の史的 연구 (第 20 報)」, 前掲書, p.299
- (84) 北野与一 (1994), 「日本における心身障害者体育の史的 연구 -告示学習指導要領時代 (1971 - 1985) の病弱 (喘息) 児体育について-」, 前掲書, pp.206-207
- (85) 北野与一 (1979), 前掲論文, 前掲書, pp.130-138
- (86) 北野与一 (1980), 前掲論文, 前掲書, pp.101-110
- (87) 北野与一 (1979), 前掲論文, 前掲書, pp.136-138
- (88) 北野与一 (1980), 前掲論文, 前掲書, pp.104-105
- (89) 北野与一 (1980), 前掲論文, 前掲書, p.104
- (90) 北野与一・東正雄 (1978), 前掲論文, 前掲書, pp.81-82
- (91) 北野与一 (1979), 前掲論文, 前掲書, pp.19-20, 23-24, 27-28
- (92) 北野与一 (1979), 前掲論文, 前掲書, p.19
- (93) 北野与一 (1979), 前掲論文, 前掲書, p.22
- (94) 北野与一 (1985), 「日本における心身障害者体育の史的 연구 (第 10 報)」, 前掲書, pp.18-19
- (95) 北野与一 (1985), 「日本における心身障害者体育の史的 연구 (第 11 報)」, 前掲書, pp.90-91
- (96) 北野与一 (1988), 前掲論文, 前掲書, pp.175-178
- (97) 北野与一 (1991), 「日本における心身障害者体育の史的 연구 (第 17 報)」, 前掲書, p.80
- (98) 北野与一 (1994), 「日本における心身障害者体育の史的 연구 -告示学習指導要領時代 (1971 - 1985) の病弱 (喘息) 児体育について-」, 前掲書, p.211
- (99) 北野与一 (1995), 「日本における心身障害者体育の史的 연구 -告示学習指導要領時代を中心とした病弱 (血友病, 肥満, 心身症) 児体育について-」, 日本特殊教育学会第 33 回大会発表論文集, pp.932-933
- (100) 北野与一 (1991), 「日本における心身障害者体育の史的 연구 (第 20 報)」, 前掲書, p.299
- (101) 北野与一 (1993), 「日本における心身障害者体育の史的 연구 -戦後における学習指導要領制定以前の病・虚弱児体育について-」, 前掲書, p.58
- (102) 東正雄・北野与一 (1979), 前掲論文, 前掲書, pp.136-137
- (103) 北野与一 (1980), 前掲論文, 前掲書, p.105

- (104) 北野与一・東正雄 (1978), 前掲論文, 前掲書, pp.80-81
- (105) 北野与一 (1983), 前掲論文, 前掲書, pp.114-115
- (106) 北野与一 (1984), 前掲論文, 前掲書, pp.116-117
- (107) 北野与一 (1985), 「日本における心身障害者体育の史的研究 (第11報)」, 前掲書, pp.80-85
- (108) 北野与一 (1986), 前掲論文, 前掲書, pp.177-179
- (109) 北野与一 (1988), 前掲論文, 前掲書, pp.171-174
- (110) 北野与一 (1991), 「日本における心身障害者体育の史的研究 (第17報)」, 前掲書, pp.77-78
- (111) 北野与一 (1990), 「日本における心身障害者体育の史的研究 (第18報)」, 前掲書, p.335
- (112) 北野与一 (1994), 「日本における心身障害者体育の史的研究—通達学習指導要領時代 (1963 - 1971) における病弱体育について—」, 前掲書, p.6
- (113) 北野与一 (1994), 「日本における心身障害者体育の史的研究—告示学習指導要領時代 (1971 - 1985) の病弱 (喘息) 児体育について—」, 前掲書, p.211
- (114) 北野与一 (1994), 「日本における心身障害者体育の史的研究—告示要領時代の病弱 (筋ジス) 児体育について—」, 日本特殊教育学会第32回大会発表論文集, p.367
- (115) 北野与一 (1993), 「日本における心身障害者体育の史的研究—告示要領時代の腎疾患児体育について—」, 日本体育学会第44回大会号, (A), p.130
- (116) 北野与一 (1994), 「日本における心身障害者体育の史的研究—告示学習指導要領時代を中心とした病弱 (心疾患) 児の教育的・医療的背景とその体育について—」, 日本体育学会第45回大会号, p.155
- (117) 北野与一 (1995), 「日本における心身障害者体育の史的研究—告示学習指導要領時代を中心とした病弱 (重症心身障害) 児体育について—」, 日本体育学会第46回大会号, p.160
- (118) 東正雄・北野与一 (1979), 前掲論文, 前掲書, p.131, 135, 138
- (119) 北野与一 (1977), 「盲学校体育における教材・教具の発達」, 北陸大学紀要, (1), pp.91-92, 94-97
- (120) 北野与一 (1977), 前掲論文, 前掲書, pp.93-94, 98-99
- (121) 北野与一・東正雄 (1978), 前掲論文, 前掲書, pp.80-81
- (122) 北野与一 (1979), 前掲論文, 前掲書, p.23
- (123) 北野与一・東正雄 (1978), 前掲論文, 前掲書, pp.79-80
- (124) 北野与一 (1986), 前掲論文, 前掲書, pp.167-177
- (125) 北野与一 (1990), 「日本における心身障害者体育の史的研究 (第18報)」, 前掲書, pp.331-332
- (126) 北野与一 (1988), 前掲論文, 前掲書, p.182
- (127) 北野与一 (1991), 「日本における心身障害者体育の史的研究 (第17報)」, 前掲書, p.80
- (128) 北野与一 (1990), 「日本における心身障害者体育の史的研究 (第18報)」, 前掲書, pp.338-339
- (129) 北野与一 (1993), 「日本における心身障害者体育の史的研究—戦後における学習指導要領制定以前の病・虚弱児体育について」, 前掲書, pp.48-53
- (130) 北野与一 (1994), 「日本における心身障害者体育の史的研究—通達学習指導要領時代 (1963 - 1971) における病弱体育について—」, 前掲書, pp.4-5
- (131) 北野与一 (1994), 「日本における心身障害者体育の史的研究—告示学習指導要領時代 (1971 - 1985) の病弱 (喘息) 児体育について—」, 前掲書, pp.206-207
- (132) 北野与一 (1993), 「日本における心身障害者体育の史的研究—告示要領時代の腎疾患児体育について—」, 前掲書, p.130
- (133) 北野与一 (1993), 「日本における心身障害者体育の史的研究—戦後における学習指導要領制定以前の病・虚弱児体育について」, 前掲書, p.56
- (134) 北野与一 (1994), 「日本における心身障害者体育の史的研究—告示学習指導要領時代 (1971 - 1985) の病弱 (喘息) 児体育について—」, 前掲書, pp.207-208
- (135) 北野与一 (1993), 「日本における心身障害者体育の史的研究—告示要領時代の腎疾患児体育について—」, 前掲書, p.130
- (136) 北野与一 (1994), 「日本における心身障害者体育の史的研究—告示学習指導要領時代を中心とした病弱 (心疾患) 児の教育的・医療的背景とその体育について—」, 前掲書, p.155
- (137) 北野与一 (1994), 「日本における心身障害者体育の史的研究—告示要領時代の病弱 (筋ジス) 児体育について—」, 前掲書, p.367
- (138) 北野与一 (1995), 「日本における心身障害者体育の史的研究—告示学習指導要領時代を中心とした病弱 (血友病, 肥満, 心身症) 児体育について—」, 前掲書, pp.932-933
- (139) 北野与一 (1995), 「日本における心身障害者体育の史的研究—告示学習指導要領時代を中心とした病弱 (重症心身障害) 児体育について—」, 前掲書, p.160
- (140) 北野与一 (1990), 「日本における心身障害者体育の史的研究 (第18報)」, 前掲書, p.339
- (141) 東正雄・北野与一 (1978), 前掲論文, 前掲書, pp.70-77
- (142) 北野与一・東正雄 (1978), 前掲論文, 前掲書, pp.81-84
- (143) 北野与一 (1985), 「日本における心身障害者体育の史的研究 (第11報)」, 前掲書, pp.85-92
- (144) 北野与一 (1991), 「日本における心身障害者体育の史的研究 (第17報)」, 前掲書, pp.78-80
- (145) 北野与一 (1994), 「日本における心身障害者体育の史的研究—通達学習指導要領時代 (1963 - 1971) にお

- ける病弱体育について」, 前掲書, pp.6-7
- (146) 北野与一 (1977), 前掲論文, 前掲書, pp.94-96, 100-101
- (147) 東正雄・北野与一 (1978), 前掲論文, 前掲書, p.75
- (148) 北野与一・東正雄 (1978), 前掲論文, 前掲書, pp.81-82
- (149) 東正雄・北野与一 (1979), 前掲論文, 前掲書, pp.130-132
- (150) 北野与一・東正雄 (1978), 前掲論文, 前掲書, pp.81-82
- (151) 中里智英子 (1982), 「まずははいはい運動から」, スペシャルオリンピック, 1 (2), pp.4-7
- (152) 武田千秋 (1983), 陸上競技部を指導して」, スペシャルオリンピック, 2 (1), pp.38-41
- (153) 日本身体障害者スポーツ協会 (1992), 身体障害者スポーツの記録, (平成3年度調研究報告書), 日本身体障害者スポーツ協会, pp.3-6, 17-50
- (154) 北野与一 (1991), 「日本における心身障害者体育の史的研究 (第17報)」, 前掲書, pp.79-80
- (155) 北野与一 (1977), 前掲論文, 前掲書, pp.96-99
- (156) 山脇こずえ (1991), 「肢体不自由養護学校におけるボールゲームの実践の一例『府中サッカー』」, 重度障害者に対するスポーツの適用について, 日本身体障害者スポーツ協会, pp.41-52
- (157) 日本身体障害者スポーツ協会 (1991), 新しい身体障害者スポーツ, (調査研究報告書), 日本身体障害者スポーツ協会, pp.27-30
- (158) 北野与一 (1980), 前掲論文, 前掲書, pp.101-110
- (159) 北野与一 (1979), 前掲論文, 前掲書, pp.20-28
- (160) 北野与一 (1985), 「日本における心身障害者体育の史的研究 (第17報)」, 前掲書, p.79
- (161) 日本盲人マラソン協会編 (1991), 盲人マラソン競技, (調査研究報告書), 日本盲人マラソン協会, pp.4-7, 83-89
- (162) 日本身体障害者スポーツ協会 (1992), 前掲書, pp.39-48
- (163) 日本身体障害者スポーツ協会 (1992), 身体障害者スポーツ種目別普及研究事業調査研究報告書, 日本ろうあ体育協会 (陸上競技の部, テニス競技の部, 卓球競技の部, バレーボール競技の部), 日本身体障害者スポーツ協会, pp.12-29
- (164) 日本身体障害者スポーツ協会 (1992), 身体障害者スポーツの記録, pp.39-48
- (165) 『スペシャルオリンピック』編集者 (1982), 「第1回日本スペシャルオリンピック全国大会競技記録」, スペシャルオリンピック, 1 (1), pp.52-63
- (166) 日本身体障害者スポーツ協会 (1992), 身体障害者スポーツの記録, p.10
- (167) 日本身体障害者スポーツ協会 (1991), 新しい身体障害者スポーツ, pp.14-18
- (168) 日本身体障害者スポーツ協会 (1991), 重度障害者に対するスポーツの適用について, pp.41-52, 93-121
- (169) 北野与一 (1977), 前掲論文, 前掲書, p.102